

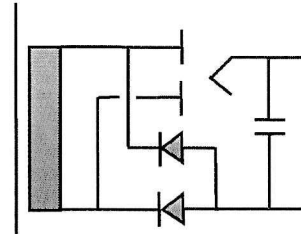
このアンプの原型（コンセプト）は、1982-1983年頃、武末数馬氏が「ラジオ技術」に公表した「完全 pp(プッシュプル)」と称したアンプです。これは、

入力トランスで昇圧(1:2)するとともに位相反転し、上側と下側を2段増幅する、というもので、1段目初段と2段目出力段とで、歪みの打ち消し、プッシュプル構成の上下でも打ち消しあって、物理特性を向上させようというのが狙いでした。武末氏は出力管に EL34 を使用しており、本機も当初 EL34 を使う予定でしたが、板金加工にかかったところで気が変わり、5998A に変更となりました。ラ技術誌の原型はタンゴの特注入力トランスを使っていましたが、入手不可なので、サウンドパーツ（松本市）扱いの「反転チョーク」を使いました。1段目は従来通りのロー(中) $\mu$  トライオードの路線を堅持し、12AU7A と 6SN7 による SRPP です。NFB をかけない無帰還アンプなので、実用上、必要な利得が確保されています。

#### <整流管とシリコンによるブリッジ整流>

整流管を使用すると、B 電源の立ち上がりを遅らせることができ、各部の保護になります。

手持ちのトランスがブリッジ整流用のとき、この方式→はいかがでしょうか。



春日の HP によれば、DC 電流は AC 値の 63% みてよい、ということになっていて、両波整流の 50% に対し、電流値が大きく取れます。また、巻始めに 10V、巻終わりに 20V のタップを出しておけば、この組み合わせで 10V 間隔で 4 種類の電圧を選ぶことができます。

#### <直列ヒータ配線>

ヒータ巻線の電圧を 12.6V にして出力管 2 本を直列点火しています。

配線の引き回しを簡略化するのが狙いです。

#### <二芯シールド>

何十年、何十台と製作してきたベテラン諸氏でも、入力端子→VR→初段管のシールド線のシールド側、アース線の処理には、毎回悩まされるのではないかと思います。二芯シールド（シールド内に 2 本の芯線が入っています）を使ってスッキリ解決しています。大須の電線屋で購入したもので、MVVS-2C という規格です。1m あたり@150 でした。外装が太いのが欠点ですが、芯線は 0.3sq の太さがあります。

#### <冷却ファン>

前作 CSPP 機と同様、内部に冷却ファンを組み込んでいます。

#### <フィルタチョーク、リップルフィルタ>

LUX、タムラのフィルタチョークは 2 巻線に分けて直列、並列いずれにも使えるようにしているものがあります。2 巻線を L,R それぞれに分けて接続し、左右の分離を良くするようにしています。

これに加えて、パワー-MOS-FET によるリップルフィルタを初段、終段、左右それぞれ、4 回路組み込んでいます。

